

# 311ゼミナール第5期 **次世代伝承班**

## 活動報告書



### 第5期 次世代伝承班・活動メンバー

G3029	3年	原萌夏	G3033	3年	猪狩光希
G3252	3年	小山有美華	G4001	2年	会津春菜
G4013	2年	安部朋奈	G4193	2年	馬渡紗恵
G4305	2年	小池いちか	G5079	1年	後藤咲佳
G5080	1年	後藤美姫	G5130	1年	関町咲穂
G5179	1年	星陽菜乃			

# 目次

1. 活動の概要
2. 震災伝承漫画による伝承の調査検討
  - 2-1. 調査の目的
  - 2-2. 現地調査の行程
  - 2-3. 漫画の主人公となった4名の語りと聴き取り
    - 阿部任さん（石巻市南浜地区）【現地語り】
    - 近藤日和さん（石巻市南浜地区）【現地語り】
    - 武山ひかるさん（東松島市大曲地区）【現地語り】
    - 志野ほのかさん（東松島市野蒜地区）【語り部動画】
  - 2-4. 漫画家の思い
  - 2-5. 総括
3. 東松島市野蒜地区の聴き取りと視察
  - 3-1. 視察の目的
  - 3-2. 行程
  - 3-3. 後藤美姫さんの避難体験
  - 3-4. 定林禅寺の出来事
4. 活動全体からの考察と今後の展望
5. 活動を振り返って

## 1. 活動の概要

前期まで「防災教育班」として活動していたメンバーが、第5期では「東日本大震災を知らない世代に向けて、何をどう伝え継ぐか」というテーマに関心を深め、「次世代伝承班」として活動することにした。

震災の経験や教訓を風化させないために必要な伝承のあり方について考えるため、漫画という媒体で伝え継がれている内容を、主人公の現場での語りにも触れて比較検討したほか、津波からの避難した記憶があるメンバーの体験に基づき現地視察や聴き取り調査を行い、教育現場での伝承に生かす方向で検討を始めた。

## 2. 震災伝承漫画による伝承の調査検討

### 2-1. 調査の目的

東日本大震災を伝え継ぐ手段としては、経験者による現地やオンラインでの語りのほか、動画や写真などの活用による講話や学習が広く行われてきた。最近では、出来事や体験を紙芝居や漫画という形で再現し、子どもたちにも興味を持ってもらう形で教訓を分かりやすく伝える活動も多く見受けられる。

次世代への伝承ツールとして、それら子どもを意識した媒体の可能性に興味を持ち、メンバーは震災伝承連携団体である公益社団法人3.11メモリアルネットワーク(事務局・石巻市)が2023年3月に発行した震災伝承漫画『あの時、子どもだった私たちから伝えたいこと』(全3巻)に注目した。

その内容を把握するとともに、主人公になった当事者にとって、現地で語り部活動を再現してもらう形で伝承にかかる思いなどを聴き取ることにした。漫画家の思いも参考に、漫画による伝承の有効性などを考察した。

### ○震災伝承漫画『あの時、子どもだった私たちから伝えたいこと』について

東日本大震災当時、小学生から高校生だった6人の子どもたちが、「あの時、子どもだった語り部」として、当時は言葉にできなかった思いと語られなかった物語を漫画にまとめたものである。当初は、取材漫画家の井上きみどりさんが聞き取り書き起こした漫画に音声とモーションを加え、「まんが動画」が作成された。2021年3月より石巻市の震災伝承施設「MEET門脇」で上映していたが、より多くの人に見てもらうため紙媒体の震災伝承漫画として23年3月に年版された。全3巻各500円で販売中。



## 2-2. 現地調査の行程

現地調査は2023年9月30日土曜日に以下の行程で行った。

石巻市南浜地区と東松島市大曲地区、野蒜地区を訪ね、漫画の主人公になった6人のうち3人に被災現場で語り部活動を再現してもらう形で聴き取りを行い、1人は語り部動画の内容を現地で確認する方法で調査を進めた。

- 7:50 JR仙台駅東口バスプール集合
- 8:00 出発(マイクロバスチャーター)
- 9:00 石巻市南浜地区到着
  - ・MEET 門脇(3.11 メモリアルネットワーク事務所)見学
  - ・現場移動(東松島市大曲地区へは 9:45 出発)
- 10:00 聴き取り開始
  - ・3班に分かれて、3人から被災体験現場で聴き取り
  - 《阿部任さんと近藤日和さん(石巻市南浜地区)》
    - ・南浜地区、徒歩で動ける範囲で適宜
    - ・時間を見てMEET門脇に戻り、2階会議室等で質疑応答、意見交換
  - 《武山ひかるさん(東松島市大曲地区)》
    - ・大曲地区、マイクロバスで動ける範囲で適宜
    - ・マイクロバス車内も活用しながら、質疑応答、意見交換
    - ・12:00までに終了(東松島市班も含めて)
- 12:00頃 昼食休憩 (MEET門脇 2階会議室)
- 13:00 震災遺構「門脇小学校」視察
- 14:00 MEET門脇集合・出発
- 14:30 東松島市野蒜地区
  - ・震災漫画の登場人物の一人、志野ほのかさんの被災体験地を確認
- 16:00 野蒜地区出発
- 17:30 JR仙台駅東口解散

## 2-3. 漫画の主人公となった4名の語りと聴き取り

以下、漫画の主人公4人について、現地や動画での語りと聴き取りの内容を整理し、漫画伝承の意義について学んだことをまとめた。

### ○阿部任さん(石巻市南浜地区)【現地語り】

#### <概要>

阿部さんは石巻の中学校を卒業後、仙台の高校に進学し、仙台市内で一人暮らしをしていたが、たまたま石巻市南浜地区の自宅に帰省している時に被災した。津波は家の2階まで押し寄せ、瓦礫によって家の中に閉じ込められて外に出られなくなり、そこから、救助を待つ

日々が続いた。数日後、余震によって家の壁がはがれ、そこから屋根の上に脱出することができた。家は1階が完全に壊れ、2階だけが津波によって流された。

阿部さんが救助隊によって救出されたのは、地震発生から9日後だったという。阿部さんは、自分の体験について、避難できる状況だったのに、避難しなかったために被災した失敗談だと考えていたが、メディアによって「9日間祖母を守ったヒーロー」「奇跡の救出」と取り上げられ、追いかけることになり、メディアと震災について心を閉ざしてしまい、大きな傷になってしまったという。阿部さんは、自分の体験を通して、「メディアは被災者をそっとしてあげてほしい」ということや「自分のような失敗をしてほしくない」ということ、漫画伝承は伝承にとって大切な、人の気持ちや感情を伝えるために効果的なのではないかという考え方などを伝えてくれた。



#### <伝承についての考え方>

阿部さんが考える伝承の一番重要なことについて、「当時の被災地の状況を生々しく、正確に伝えるだけが重要なのではない。当時の人が選択した行動や気持ちの部分、そして実際に現地に足を運び、見た人の正直な考えを伝えていくことの方が重要だ」と語った。

その伝承の手段として、アニメや絵本、紙芝居ではなく漫画にこだわり抜いた理由には、地元石巻市の石ノ森萬画館の存在が大きく影響している。町おこしで震災前から力を入れていた漫画で、伝承に活かす方法について話す阿部さんからは地元愛を感じた。

また、今までの伝承活動では、自前のiPadで当時の写真を使いながら伝える方法をとっていたが、漫画本の刊行をきっかけに「言葉では伝わりづらい感情の部分を、漫画ならではの柔らかい描写を使うことで伝えやすくなっただけでなく、語り部を行う機会が増えた」と言う。

子どもから大人まで気楽に手に取れて、分かりやすく読みやすい漫画。語り部活動では、読んだ人には場面が繋がるように、まだ読んでない人には読んで見ようかなという好奇心を与えられるようにすることで、阿部さん自身の失敗談について考えてもらい、生きるための判断を身に付けて欲しい、そういった願いを込めながら漫画伝承と現地での語り部による伝承という2つの伝承の仕方で活動をしている。

#### <学んだこと>

漫画による伝承について、阿部さんは、写真では、どんなに町がぐちゃぐちゃになったかをリアルに伝えることができるが、伝承ではそこが重要なのではない。また、受け取り側の解釈によって伝わる内容に幅が出ることもそれはそれでいいことであるのではないかと話されていた。

この考え方は、私達にはない意見で、伝承について改めて考える機会になった。また、阿部さんは漫画制作が被災経験を受け入れる大きなきっかけになったとおっしゃっていた。分かりやすいイラストと言葉で描かれた漫画という形に残すことで、自分の中に埋まっていた情に気付き、伝えたいことを知る手掛かりになったという言葉聞いて、漫画だ

けでなく何か視覚化された、形あるものに表現すればするほど、第三者に伝わりやすくなると同時に、被災者の心を整理し、受け入れる手助けをする役割も担っていると思った。

また、現地へ出向くことの大切さを実感した。阿部さんの被災経験は、震災当時、奇跡の救出とニュースで報じられた。しかし、ご自身の経験を阿部さんは「後悔」という言葉を用いて話されていた。その他に、海・川・家・山の距離関係や、漫画では描かれなかった門脇小学校のことなど、漫画には詳しく描かれなかった部分を知り、阿部さんの被災経験をより客観的に考える事ができたと思う。

阿部さんから「昔は排他的な街だった。ボランティアの人が来てくれても、よその人が来たって何をするんだ、という傾向が強かったが、震災を通して、あの時助けて貰ったからこれからは自分たちが色々な人に恩返ししていく番だという意識に街全体が変わっていった」というお話を聞くことができた。そのお言葉通り、私たちが聞き取り調査をしながら街を歩いていると、出会った人が声をかけてくれ、街の人が自分たちから当時のことを私たちに教えてくれた。

今回の聞き取り調査では、漫画伝承と現地での語り部による伝承の双方の魅力を学ぶことができ、大変実り多いものとなった。

## ○近藤日和さん（石巻市南浜地区）【現地語り】

### <概要>

門脇小学校6年生の時に被災した。当時、近藤さんは小学校卒業前の大掃除をしていた。ランチルームを清掃している最中に大地震が発生し、揺れがおさまった後校庭から日和山へ避難し、自分たちの住む南浜地区が津波で沈み、火災が発生する様子を山の上から眺めていた。

学校で避難訓練は行われていて、日和山に避難することは決まっていたが、近藤さんは「津波が来るから山に避難するという意識はあまりなく、津波についての知識も無かった」と言っていた。

その日、津波によって流された建物などで町に降りることはできず、親が迎えに来なかった子どもたちは山の近くの高校に避難することとなった。近藤さんは3日後に姉と母が迎えに来て、中学校で避難生活を送ることになった。当時6年生だった近藤さんは、避難所の中でじっとしていることを退屈に感じ、学校の図書館に本を読みに行ったり、炊き出しのシチューを堪能したり、芝生で昼寝をしたりするなど、避難所生活を楽しんでいたという。「周りの大人に申し訳ないくらい楽しんでいた」と言っていた。

その後、津波で崩壊した自宅を見に行くと、製糸工場の壁がストッパーとなり、家具の形が残っていたらしい。その中で、預金通帳を見つけたが、ヘドロのあまりの臭さに投げたところ、自衛隊の貴重品を回収する人々に回収されてしまったという今だからクスッと笑える体験談があった。

被災経験の中に、面白かったり、楽しかったりしたことがあったことを主張して、ただ悲しいだけでなく、前向きに震災を捉えることの大切さを近藤さんは語りを通して伝えてくれた。



### <伝承についての考え方>

近藤さんは震災伝承について、「悲惨さだけが伝わると、良かったことが記憶されなくなり、『辛かった』という感情だけで終わってしまう。震災を悲観して欲しくない。辛い事ばかりを伝えたり考えたりするのは疲れてしまうから」と語った。近藤さんのストーリーは、当時の楽しかったことや面白かったことが多く取り上げられていて、漫画家の先生にも「震災をつらかった、苦しかったで終わらせたくない」と気持ちを伝えていた。

そして、伝承方法について、漫画は気軽にすすめてきて、「気になったら直接話を聞いてみてください」と語り部に繋げることができる、と言う。一方で、漫画にする時に、ストーリーとして成立させるために、削除したり雰囲気を変えたりした内容があり、背景にある事実が伝わらない一面があるとも述べた。さらに、これから先10年、20年経って内容が伝わるのか、読み手に通用するのかという不安もあり、漫画そのものをアップデートしたり、新たな文面に残る表現を試みたりしたいと展望を述べていた。

自身の語り部活動に関して、語り部を行う人が減少し続けているという課題について触れていた。自分の被災経験を軽い経験であるから、人に話すほどではないと判断して、消化できないまま胸の内に積もっていく人々が多くいるだろうと考えている。近藤さんは「語りは『経験の軽い・重い』ではなく、人と比べることではない」と述べていた。人の数だけ経験した東日本大震災の事実があるため、誰かに話すことは、震災の記憶を次の世代に伝えていくために、自分の命を守り生きていくために大切だと強く訴えていた。

### <学んだこと>

震災伝承に対する考え方が大きく変わった。

今まで、同じ過ちを繰り返さないでほしいという切実な思いを悔しそうな、辛そうな表情で語る語り部の方たちにお会いして、この苦しい思いを二度とさせない・しないために防災教育や伝承に力を入れたいと思ってきた。

近藤さんのように震災を明るく語り、震災は怖い、恐ろしいことだという認識の一步先へ繋げたいという考えは、伝承の一つとして大変効果的だと感じた。伝承方法について、漫画は誰もが手に取りやすいことや、震災を知るきっかけとして設定しやすいことなど、とても有効な伝承方法だと思っていたが、どこまで（時間や人など）通用するのかをしっかりと考えて用いることの重要性に気付いた。震災後の対応で良かったこと、うまくいったことも強く伝えるべきであると考えている。

## ○武山ひかるさん（東松島市大曲地区）【現地語り】

### <概要>

当時大曲小学校4年生だった武山さんは、教室で授業を受けている際に被災した。教員の指示で教室から校庭へ避難した後、迎えに来た母親と貴重品を取りに家へ戻る。その後、一度公園へ避難したものの、デマも流れるなど情報が錯乱し、正しい情報の入手が困難であった。同時に、雪も降って寒いので毛布を取りに戻ろうという話になり、帰宅を決断。しかし、その途中で津波に巻き込まれ車で一夜を過ごすこととなる。翌朝小学校へ避難するも、避難先の小学校では満足な食事や寝床は確保できなかった。仮設住宅ができるまでの2か月半、3つの避難所を転々としながら生活を送る。避難所には心の余裕がない大人が多く、張りつめた空気を感じ取っていたという。行き場のない不安を紛らわすために遊んでいると「子どもは気楽でいいな」という大人からの視線を受け、かといって炊き出しの手伝いなどを申し出ると「危ないから」といって拒まれる生活に、子どもたちは不満を感じていたようだ。

そのせいか、震災から1か月後に学校が再開された際、感情のコントロールができない同級生が目立っていた。また、「学校では震災の話をしてはいけない」という雰囲気があり、学校の中でも自分の気持ちを吐き出せないことに憤りを感じていた。教員など大人は、子どもの声に耳を傾けようとしなかった。自分の気持ちを理解してもらえず、辛かった。子どもも一人の人間として、感じていたことは山ほどあったのである。

被災から4年後、15歳のときに「震災語り部」としての活動を始めた。一人の子ども、一人の人間として言葉にできなかった当時の思いを伝えるためである。現在は、大学卒業を経て、社会福祉施設の職員として働く傍ら、引き続き語り部活動を行っている。あの日の子どもの目線で、今日も語り続けている。

武山さんは、避難先の小学校で子どもの居場所がなく窮屈な思いをして過ごした経験から、大人も子どももお互いに認め合い話ができる環境をつくる必要があると伝えてくれた。



### <伝承についての考え方>

伝承する際には、分かりやすければ分かりやすいほど良いというのが武山さんの考えである。語り部は、本人である自分自身しかいないので、特定の場所でしか伝承することができない。一方で漫画は、語り部本人がいなくても、不特定多数の人に広く伝えることができる。また、耳の不自由な方であれば「目で見たい」、実際に現地を訪れて「体験したい」など、情報を得る相手のあらゆるニーズに合わせて、伝承の手段を変えていく必要もある。漫画は、小学生にとっても手に取りやすく、伝わりやすいため、そこが漫画を活用するメリットだと考えられる。

### <学んだこと>

実際に語り部の方のお話を直接聞いたり、直接現地に行ったりして、過去の写真と現在の様子を見比べるとではだいぶ印象が異なった。漫画を読んだだけでは分からなかった距離感、風景などを感じ取るために、実際に現地に行って話を聞くなどの直接的な体験も必要だと感じた。

武山さんも震災当時はつらい、大変な思いをたくさんしたと考えられる。しかし、終始明るく話をしてくださった。震災当時、辛いことだけではなく、良いことや学び得たこともあったそうだ。「いつ来るか分からない地震や津波が怖いことや、家族や友人など周囲の人が亡くなるなどの悲しいことが被災体験の全てではない。逆に、避難所生活の中で新しい友人ができるなど、明るい話題もあったのは事実である。」とおっしゃっていた。人によって震災をどう捉えるか、どのような内容を伝承していきたいのか、どのような方法で伝承していくのかが、それぞれ異なってくるのだと改めて感じた。

### ○志野ほのかさん（東松島市野蒜地区）【語り部動画】

※J:COM震災アーカイブ「未来をつなぐ語り部の声」収録の語り部動画を視聴

<https://www.youtube.com/watch?v=L35iDJkIzNs&t=1s>

#### <概要>

東松島市野蒜小学校で当時小学6年生の時に被災した。校門を出て帰ろうとしたときに地震を体験し、その後体育館に避難した。

地震から1時間後、急に体育館内でざわつき始め、一緒にいた友達の手を引いて2階のギャラリーに上がる階段に走り出した。次の瞬間、ステージの両脇にある倉庫の扉を破って泥水が流れ込み、水の高さはあっという間に高くなって、体育館は洗濯機のように渦を巻き始めた。大人たちは流された人を2階に必死に引っ張り上げて

いて、狭いギャラリーは150人くらいでぎゅうぎゅうになった。渦に飲み込まれていた車いすのおばあちゃんの苦しそうな顔や悲鳴を今でも忘れられない。

学校の裏には高台があり、そこに通じる道路もあった。逃げ場所を体育館だけでなく、高台も考えていれば、犠牲になる人も出なかっただろう、と話す。

自宅も流され、自分の帰りを待っていたおじいさんが津波にのまれて亡くなった。おじいさんはチリ地震津波も経験していた人だが、思い出話にとどまっていた。2日前の3月9日にも大きな地震があった。その日に「おじいさんは私を待たずに逃げて」と伝えておけば、おじいさんは犠牲にならなかっただろう。一生消えない後悔が残った。津波



避難はてんでんことと言われる。皆さんも家族で避難のことを話し合ってください、と伝えている。

#### <伝承についての考え方>

体験した人が話さないと薄れていってしまうものだし、おじいさんを亡くしたことでその死を無駄にしたくないという使命感が強くある。自分の語り部の話を聞くことで、家族で防災について考えて話し合う機会を設けるきっかけになってほしいと思っている。

#### <学んだこと>

##### ○動画と漫画の比較を行ってみて

動画のメリットは実際の現場を確認することができ、感情が伝わってくる。そして状況が把握しやすく、音声と字幕で理解が深まる、語り部さんの顔や声色が分かるなどが挙げられた。動画のデメリットとしては、時間が長いと見たくない人が増えるかもしれないという懸念や、音がないと伝わらないという点が挙げられた。

漫画のメリットはかわいらしいイラストで表されているので読みやすい、サクサク読める、気軽に読める、子どもたちでも理解できる、一冊の本として永久保存ができる、音が出ないのでどこでも読める、言いづらい内容の部分（例えばおじいさんの遺体安置所のシーン）でもイラストでは表現できる、外国語版も作れば外国人も理解できる、などたくさんの点が挙げられた。漫画のデメリットは現場を想像しづらい、文字が読めないと伝わらない、浸透させるのが動画より難しいなどが挙げられた。

## 2-4. 漫画家の思い

震災伝承漫画『あの時、子どもだった私たちから伝えたいこと』は、仙台市の漫画家井上きみどりさんが取材、作成を手掛けた。冊子の刊行を記念して3.11メモリアルネットワークが2023年3月31日に「MEET門脇」で開いた「出版記念おしゃべり会」の動画が公開されており、きみどりさんが語った内容を以下、整理する。

※参照 3.11メモリアルネットワーク動画；「あの時、子どもだった私たちから伝えたいこと」出版記念おしゃべり会<https://www.youtube.com/watch?v=fe2xJ85PhdE>

#### <経緯>

きっかけは石ノ森萬画館を運営する会社「まちづくりまんぼう」の社長たちから、現在の南浜つなぐ館に招集され「何か防災伝承に関してできることはないか」と問われたことである。きみどり先生の他にも漫画家が集められたことから、漫画で震災を伝えることが目的であった。最初に、1話パネル1枚だけの漫画にするという案が出たものの、詰められる情報が少なすぎるというデメリットが生じた。次に、漫画のスライドショーという案が出て、きみどり先生はこの企画が始まる前に漫画が動く下書き劇場という漫画動画を試みていたため、きみどり先生が担当することになった。



取材をしてそのストーリーを漫画にする取材漫画として、取材対象の6人が決まり、取材が開始された。1人1時間の取材で、聞いていて感情が溢れる瞬間があったという。漫画動画は声優の関係で公にすることが厳しくなったため、漫画として普及させることを決めた。読者対象は親の助けを借りた小学校高学年を想定した。

#### <伝承漫画への思い>

きみどり先生は、発災から10年以上が経過した震災について「何年過ぎても東北の日常には震災がある」と語り、「次に震災が来た時に未来の命を守りたい」と伝承によって同じような犠牲が繰り返されないような努力をする意義を強調した。

さらに、漫画に込めた思いとして「そんな可哀想な子どもがいたんだね、で終わるのではなく、世の中には大変なことがあって、未来の災害も間近にある状態で、子どもたちには潜在的に生きる力や乗り越える力があるということを伝えたい」と語っている。

漫画そのものについて「漫画は引き算の読み物。文字も線も限りなく少なくすることで、読み手に想像の余地が生まれる。自分を投影させて読まなければならないため、(漫画は)自分事として捉えるツールになる」「関心のない人にも手に取って読んでもらえるという期待がある」とその利点を説明した。

## 2-5. 総括

今回、漫画の内容を把握し、漫画の主人公へインタビューしたことで、震災伝承の一つの方法として漫画が有効であることや、どのような思いで自分の被災体験を物語へ紡いでいったのかという過程について知ることができた。また、現地で語り部から直接話を聞くことでしか得られない感情にも出会うことができた。

私たちはインタビューの後に震災伝承交流施設「MEET門脇」を訪れ、子ども防災学習コーナーにある漫画動画を視聴した。漫画がアニメーションになっており、さらに声がついているものである。漫画を読んだ時とは違う印象を受けた。動画になることで、漫画と比較してより現実味が増していた。声がつくことでより恐怖、焦り、悲しみ、楽しさ、嬉しさ、必死さなどの感情が伝わってきて、より視聴者の心に響くように感じた。

伝承の形は様々で、伝えたいメッセージによって方法は適したものに変えることが良いのだろう。語り、漫画、漫画動画の方法を目の当たりにして、私たちはどの伝承方法を用いて次世代に何を伝えていくか、選択肢を幅広く持って検討していく必要があると考えた。



### 3. 東松島市野蒜地区の聴き取りと視察

#### 3-1. 視察の目的

次世代伝承班のメンバーである1年後藤美姫さんは、大きな被害と犠牲が出た東松島市野蒜地区の「定林禅寺」が自宅で、幼稚園のときに幼稚園バスで帰宅する途中で震災が起きた。定林禅寺は地区住民の避難先にもなったという。

後藤さんの体験を聴いて避難の様子を振り返るとともに、定林禅寺の住職である後藤さんのお父様、後藤隆善さんから聴き取りをして震災当時のお寺の様子を把握し、その内容を伝承班として紙芝居や漫画などの形で伝え継ぐ取り組みにつなげられないか、検討する。



#### 3-2. 行程

12:10頃 JR仙台駅集合  
 12:16 JR東北本線快速 石巻行（1番線） 乗車  
 《途中路線変更（\*乗換不要）》  
 ・12:33塩釜→JR仙石東北ライン快速 石巻行  
 ・12:44高城町→JR仙石線快速 石巻行

12:51 野蒜駅着、徒歩移動

13:05頃 定林禅寺着  
 《後藤さんのお父様への聴き取り》

<1>後藤さんのお父様による定林禅寺の施設紹介  
 と震災当時の出来事のお話

<2>慰霊碑の紹介、毎月11日と3月11日に行われるお祈りを聴く

<3>質疑応答16:00頃 定林禅寺出発

16:15頃 野蒜駅着（\*ここからは、後藤さん以外の4名で動く）

16:18 JR仙石線快速 仙台行（4番線） 乗車  
 《途中路線変更（\*乗換不要）》  
 ・16:26 高城町→JR仙石東北ライン快速 仙台行  
 ・16:36 塩釜 →JR東北本線快速 仙台行

16:54 JR仙台駅着・解散



#### 3-3. 後藤美姫さんの避難体験

後藤美姫さんが振り返った震災発生時の様子、避難の状況は以下の通り。

「

時制	後藤美姫さんの行動
地震発生時	卒園式の練習を終えて帰りのバスに乗っていて、何人か園児を家に送っている最中だった。
	地震が来た時、最初はバスの故障かと思った。

バスで避難する	バスの周囲では、人々が慌ただしい様子でいた。
	幼稚園に残っている園児をバスで迎えにいかうとしたが、「戻った方(幼稚園に引き返さない方)がいい」と地域の方に声をかけられて、指定避難場所である野蒜小学校へ向かう。
	野蒜小学校には避難している人が多くいて、道路には車が渋滞していた。
	野蒜小学校の側の道路に佇んでいたところ、「津波が来るぞ」と呼びかけられてバスは定林禅寺に向かうことになった。
	美姫さんは、野蒜小学校の近くまで迎えに来た祖父の車に乗って実家である定林禅寺に向かった。
定林禅寺到着	指定避難所でなかった定林禅寺が避難所となっていた。
	幼稚園の友だちや先生と避難生活を送ることになる。
	定林禅寺に避難してきた同年代の子どもと一緒に遊んだりご飯を食べたり、高校生に遊んでもらいながら過ごす。
震災後	2011年6月くらいに庁舎を借りてオフィスのような場所で入学式を行い、授業を受けた。 2年生以降、仮設校舎で学び、6年生の頃には新校舎(現在の宮野森小学校)で学ぶ。

### 3-4. 定林禅寺での出来事

<出来事について>

当時、定林禅寺の副住職をされ、現在住職でいらっしゃる後藤隆善さんの震災当時の行動は以下の通りである。

※後藤隆善さんの記憶と当時住職をされていた後藤栄喜さんからの伝聞も交えて整理

時制	後藤隆善さんの行動や思い	美姫さんの証言
3月9日	三陸沖でM7.3の地震が発生し津波が観測されたが、避難警戒への意識はあり、避難行動するも、根拠のない安心感が芽生えていた。	
3月11日 (震災発生時)	2003年に起きた北部地震よりは揺れが弱いと感じる。揺れが収まった後、外の被害状況を確認した。石灯籠は倒壊したが、墓石に被害は無かった。ライフラインにも問題は無かった。	帰りのバスの中で地震を体感
	津波警報が発令され、定林禅寺(※以下寺と省略)の駐車場に車で避難してくる人が見られた。	バスで野蒜小学校へ向かう。

	住職(美姫さんの祖父)が自宅に帰りたと言 う高齢者を野蒜小学校へ送っていった。この 時、野蒜小学校が渋滞していることを察知し た。	バスが野蒜小学校 付近で渋滞に巻き 込まれる。
	住職が幼稚園に行っていた美姫さんと弟が帰 って来ないことを知り、野蒜小学校を經由し ないルートで幼稚園まで迎えに行こうと決意 した。隆善さんは住職を止めるも幼稚園へ向 かった住職だったが、津波を目視し、小学校 を經由するルートで避難する行動へ切り替え た。	
	住職は野蒜小学校の付近の道路で渋滞に巻き 込まれていた幼稚園バスを見つけ、高台へ避 難するように呼びかけ、共に避難する。	「津波が来るぞ」 と呼びかけられて 定林禅寺に向か う。
	隆善さんは寺にて、JR仙石線の乗客が指定避 難所である野蒜小学校へ避難することに不安 を感じ、寺に避難してきた人たちを誘導して いた。	
	幼稚園バスと住職が寺へ帰ってきた。	バスが寺へ到着 美姫さんと弟、友 だちは後藤さん家 の自家用車の中 で、DVDを視聴し ていた。
	松島湾に面した新東名地区の住民が避難して きて、寺の書院へ誘導する。野蒜地区沿岸は 浸水したと予想できた。	
	鳴瀬川河口に近い地区の住民が、津波の第二 波が来る前に避難してきた。津波によってラ イフラインが断絶したことを知った。	
3月11日16時	雪が降ってきて、暖を取るために独立的に稼 働可能な石油ストーブを農家の作業場から集 めて寺の屋内へ配置した。	
	寺の厨房にて、門前地域の防火夫人倶楽部を 中心にご飯の炊き出しを行った。	
	避難者の中に電気関係の資格保持者がいたた め、ディーゼル発電機が持ち込まれ、屋内の 常夜灯と厨房の灯りが確保された。	
	寺の本堂と書院に避難者を受け入れ続けた。 幼稚園児を母屋に受け入れた。幼稚園児を迎	

	えに来た保護者も上がり込んだ。	
3月11日19時	兵庫県姫路市の知り合いから安否確認の電話がきたことで、野蒜地区が大変な状況に置かれていることを認識した。次の日には通常の生活が戻ると思っていた。	
3月11日22時まで	避難者や家族を捜索する方々の対応を行った。職場から野蒜地区へ何とかして戻ってきた人の話を聞き、広範囲が津波の被害を受けていることを知った。	
3月12日朝	書院には540名程の避難者が溢れかえっていた。 避難者が自宅の確認や家族の安否確認に出て行く。 被災した地域からの避難者が訪れて、寺には場所や医薬品が無いことを伝え、内陸の地域への避難を勧めた。	みんなで果物を分け合って食べた。
3月12日昼	避難者の対応と身内の捜索の方の対応をした。小学校の教員が子どもの安否確認をしにきた。	
3月12日夜	被災地域へ出向いた避難者が寺へ戻ってくるため、避難所の運営を続けることを覚悟して、情報収集を行った。	
3月13日	午前2時に140枚程度の毛布が市から届く。	
	ストーブの灯油が切れたこと、トイレが使用できなくなったこと、炊き出しの引継ぎ、乳児のミルクや薬を飲むための水の確保、避難者同士のトラブルの仲裁、テレビや新聞、雑誌などの取材対応をこなした。	炊き出しのおにぎりの取り合いなど
	避難所内でトラブルが多く見られるようになったため、協力的で行動力のある避難者を集め、避難所運営の組織を作った。	
3月14日	朝7時に避難所運営組織とリーダーを発表した。	
	津波で亡くなられた全ての方の為に慰霊法要を寺の本堂で行った。	
	仮設トイレの設置と避難所としての認定を受けるために市役所へ申し出を行った。 →市からの援助を受けるため。	

3月14日以降	避難所運営、救援物資の仕分けと分配や保管、取材対応、ボランティア対応、震災物故者と家族への対応が続いた。	
2011年7月20日	避難所運営を終える。	
2013年4月14日	定林禅寺に慰霊碑を建てた。 以降毎年3月11日に供養を行っている。	

※定林禅寺の施設について



△本堂



▷救援物資が届いた廊下



△厨房



▷避難者が膝を抱えて  
寝ていた廊下

<慰霊碑について>

東日本大震災の約2年後、平成25年4月14日に慰霊碑が建てられた。周辺では一番早く建てられた名前が刻まれた慰霊碑かもしれない。宗林禅寺側から連絡を取り、慰霊碑に名前を載せることを希望した人達や、慰霊碑の完成後に存在を知り、名前を載せることを希望した人達から名前や住所、年齢を確認した。後藤住職は寺の住職として震災伝承を意識していたわけではないが、震災物故者の供養と震災遺族の思いを昇華するために建てた慰霊碑を建立した背景に、風化する震災の記憶が少しでも永く伝わり、助かる人がいますようにという願いが込められていると答えてくださった。



<震災から得た教訓>

後藤住職に東日本大震災当時のことを振り返ってインタビューを行って、震災当時はそれほど大変な状況になっているとは思わなかったと仰っていたことが印象的だった。そして、

避難所運営について沢山の偶然が重なって何とか乗り越えることができたことと仰っていたことにも衝撃を受けた。後藤住職への聴き取りと野蒜地区の現地視察を踏まえて、指定避難所として指定されていた野蒜小学校では沢山の被害者が出て、避難所として指定されなかった定林禅寺では沢山の人が復興まで避難生活を送ることができたことから、地域で決められたことをそのまま鵜呑みにしているだけではいけないことと、内陸の防災意識を高めることが重要であると感じる。

また、震災伝承について、後藤住職は震災の体験を伝承するということは、体験した人たちだけが語れる、伝えるだけでは次の次には伝えられない、震災の体験がなくても、その事実には敬意と謙虚を持って接することで伝承の担い手と十分に資格があると考えたと仰った。定林禅寺に建てられた慰霊碑も名前が載っている方の親や子どもなど関係者が亡くなった後どうなるかということも言及されていたことから、震災を次世代へつなげる材料となるものはあっても、語り継ぐ人がいなければ震災の記憶が受け継がれないことを痛感する。震災伝承の担い手となり、担い手を育むことが求められている。

#### 4. 活動全体からの考察と今後の展望

前身の防災教育班から発足して1年目の今期は、主に現地視察と聴き取りに重きを置いた活動を行った。東日本大震災での経験や教訓を風化させず、今後の災害への備えに繋げていくという、震災伝承の意義を再確認するとともに、これからの震災伝承の在り方について深く考える活動となった。

石巻市南浜地区及び東松島市大曲地区を視察した際は、震災伝承漫画『あの日、子どもだった私たちから伝えたいこと』に登場する3名の方とお会いし、震災に対する捉え方と伝承の方法は多様で、目的や対象とする相手に応じて、変えていくことが必要であることを学んだ。阿部さん、近藤さん、武山さんの語り部を通し、私たちの伝承に対する捉え方が変わった。避難生活は、辛い思い出ばかりではなく楽しい思い出もあったことや、子どもも一人の人間として未曾有の災害と向き合っていたことなど、前向きに活動する子どもや若者のことも、視点を取り入れることも、伝承であると分かった。

震災の事実は、大きな地震や津波によって、甚大な被害や多くの犠牲者が出たという恐怖だけではない。私たちは、子どもや若者の視点から伝承することで、ただ事実を知って終わりとするのではなく、災害を生き抜くために自分にできることは何かを考えさせることがいかに重要であるか、活動を通して学んだ。素材としての漫画が、そのような視点に基づく伝承には有効であると総括している。

震災伝承漫画を手掛けた井上きみどり先生は、登場人物の方一人ひとりの話に傾聴し、対話を重ね、ありのままの事実と教訓が伝わりやすいように言葉や絵を工夫したとのことだった。登場人物の方が話しやすい環境をつくり、やり取りを綿密に行い、細部の表現までこだわって漫画を完成させたという。私たちも実際に手に取って読んだが、柔らかいタッチで描かれた絵と台詞から、真っ先に、登場人物の心情と当時の情景が頭に思い浮かんだ。

媒体の違いによらず、実際に起こった出来事や当事者の思いをそのまま伝えるためには、当事者との傾聴と対話、当事者のことを自分事として考える姿勢が欠かせないという伝承の基本も確認できた。

東松島市野蒜地区の視察と聴き取りでは、井上きみどり先生の姿勢から学んだことを活かし、積極的に質問し、傾聴と対話を繰り返すことによって、可能な限り当時の経験を聴き取

ることができた。現時点では聴き取りの内容整理に留まっているが、次期の活動の際、内容を細かく考え、漫画などの媒体にしていくことを検討したい。

特に、定林禅寺に多くの避難者やボランティアの方が集まり、震災を乗り越えたこと、「津波が来るぞ」という声をきっかけに幼稚園バスが引き返したこと、供養や慰霊碑など寺院ならではの取り組みは、話の鍵となるため押さえておきたい。

メンバー内での話し合いでは、震災を長い年月が過ぎても変わらず自分事として捉え、真剣に向き合い、目的や対象に応じて伝わりやすい方法を考えて伝承していくことの大切さを全員で確認した。伝承媒体の効果については、語り部、漫画、動画の比較に留まってしまったため、次期は紙芝居や絵本などその他媒体にも触れ、次世代に分かりやすく伝わりやすい伝承の方法を考え、伝承の可能性を広げていきたい。

## 5. 活動を振り返って

### 【G3252 小山有美華(3年)】

次世代伝承班が発足して1年目の第5期では、伝承とは何かを見つめ直し、東日本大震災での教訓を後世に伝えるために必要な手立てについて、視察や話し合いを通して模索していった。私が学び得たことは、現地語り部のみならず漫画や動画、紙芝居など様々な媒体があり、対象に応じて適切な媒体を選択し、当事者との対話と傾聴を通して内容を決定し、伝わりやすく工夫することの大切さである。特に、震災漫画の登場人物の方々とお会いし、当事者ならではの視点を知り、漫画家の井上きみどり先生との制作秘話から、当事者と向き合い自分事として考えることの重要性を改めて実感した。次年度は、これらの貴重な経験を活かし、後藤さんの被災体験に関する伝承媒体の制作や、学校防災に応用できる伝承媒体の提案に努めたい。

### 【G3033 猪狩光希(3年)】

今期の活動を通して、震災を“伝承する”とはどういうことなのかを視察や話し合いを通して考え、深めることができたと感じる。一口に伝承といっても、近藤さんのように明るい話題を用いて今後の震災の向き合い方について問うものと、悲惨な経験をもとに、このような悲劇を繰り返さないように今後の震災の向き合い方について問うもののような伝承する雰囲気についてや、漫画や語り部の話、語り動画、紙芝居など伝承方法についてなど、組み合わせ方によって受け手の震災に対する印象が変化するため、伝えたい内容に最も合った形を見つけることが重要であると考えた。また、東松島市野蒜の視察から、伝承には様々な領域があることを学んだ。将来教員になると考えられるため、教員の職業性や立ち位置を活かした震災伝承についても、今後の活動を通して考えていきたい。

### 【G3029 原萌夏(3年)】

次世代伝承班のスタートの年に、私自身がいちメンバーとして活動することができたのは、とても光栄に思う。伝承の方法を探るために数々の現地視察をしていく中で、「語る」方法の多様さに驚いた。地域の特性を活かした漫画制作による伝承、学生との連携で作成された紙芝居、各伝承施設で映し出される当時の映像や展示物。始めは自分の五感で震災の痕を見たいという気持ちでいっぱいだったが、それら一つ一つに出会う度に伝えることの難しさを実感した。被災者には当てはまらない者ができる伝承とは何か。これからも問い続けな

がら、まだ知らない現場に足を踏み入れていきたいと考える。また、人にはそれぞれに適した“心の快復時間”があり、伝承の表現方法によっては、被災者の心を整理し、受け入れる手助けをする役割も担っていることを学んだ。様々な形で人々の心に寄り添える伝承の方法を探っていきたいと思う。

【G4001 会津春菜（2年）】

今年度は現地視察と話し合いを通して、漫画、動画、語りなどの様々な震災伝承について理解を深めた。活動する中で震災伝承は語り手の思いや狙いを考慮して適切な方法で実践されていることに気づき、それぞれの伝承方法のメリットやデメリットを考える重要性を学んだ。また、震災伝承の目的は、震災の脅威を伝えて聞き手の警戒心を刺激することだけではなく、震災について考える機会を与えることだという語り手の思いに触れることができ、自身が震災伝承を行う際にこの視点を大切にしたいと強く思った。今年度得た学びを活かして、来年度は震災を知らない子どもたちに向けた震災伝承について研究と制作に取り組みたいと考えた。

【G4193 馬渡紗恵（2年）】

今年1年、震災伝承について、漫画、語り部、動画など、様々な形態に触れてきた。伝承方法は違っても、何かの形で震災を伝承することは、被災したそれぞれの人たちの思いや気持ちがかもっており、どれも考えさせられるものが多かった。どの伝承方法が良い悪いではなく、被災した方が届けようとしてくれているメッセージを私たち受け手が、どれだけ真剣に耳を傾けて、聞き入れようとする事ができるかが大事なのだと改めて知ることができた。今回学んだことを活かして、来年以降は自分たちで何かの形で誰かの心に訴えかけられるような伝承をできればいいなと思った。

【G4305 小池いちか（2年）】

次世代伝承班での活動を通し、私の「伝承」の考え方は変化した。伝承といえば、被災地で、被災者が、震災による惨事が再び起こらないために行う、という印象が強かった。しかし、今回漫画やアニメーション、紙芝居などの伝承方法や、そこに関わる方々のお話を聞くことで、伝承で語り手が伝えたいこと、聞き手が受け取ることは1つではないと考えるようになった。この学びを、次年度以降の実際に伝承を行う段階で生かし、伝承活動を広められるような活動がしたい。

【G4013 安部朋奈（2年）】

1年間の活動を通して、震災伝承に対するイメージが自分のなかでかなり変化した。わたしは、震災伝承に対して、次に起こるかもしれない災害の被害を最小限にするために被災経験を伝える、という認識を持っていた。しかし、伝承の方法も伝えたい内容も、それぞれ全く異なってもいいのだということを感じた。ただ、震災の恐ろしさを伝えても幼い子どもたちは考えることをやめてしまう。それぞれの震災伝承の方法で、相手に震災について考えるきっかけを何か少しでも与えることができれば、その人や社会の未来を変えることができるのかもしれないと改めて思った。

【G5179 星陽菜乃（1年）】

私は夏季休業の期間に、311ゼミナールの活動として様々な震災遺構を訪問し、語り部の方々の話を聞くことができた。この経験から、自分が知らなかった東日本大震災の被害や、それぞれの場所の震災当時の行動、それらにより起こったことを学ぶことができた。そして、災害による被害を少なくするには、災害が起きたらどのように行動するのかを事前に決めておくことや、日ごろから防災教育を行っていくことが必要だと考えた。これらのことをするには、児童生徒だけでなく教員にも災害について伝えていかなければならないため、次年度も次世代伝承班として、より良い伝承方法を考え、実施していきたいと思う。

【G5079 後藤咲佳（1年）】

あまり都合が合わなくて視察に参加できず大変申し訳なかったが、震災を経験して記憶に残っている最後の世代である私たちがこれから先どのように震災を伝承すべきか同世代の人と考え、行動できたことがとてもよい経験だった。特に現地に行って当事者のお話を生で聞くことができたのは、このゼミ生でいられたからだと強く感じる。語り部さんのお話を拝聴したり動画や漫画を拝見したりして、これからも必ず起きる災害に備えるためにも、震災の記憶を伝え続けることは大事だと改めて感じたので、この経験を自分の将来に繋げていきたいと思う。

【G5130 関町咲穂（1年）】

3.11がおきたとき、わたしの住む地域にほとんど被害はなく、宮城県民としてうしろめたさを感じていた。しかしこのゼミを通して、大きな被害を受けていないからこそできることがあることに気づかされた。伝承班としての活動では、同じ出来事でも媒体が変われば印象が大きく異なってくることを実感した。直接被災者の話を聞きに行く・現地に訪れるなどの貴重な経験を通し、多くの学びが得られた一年となった。次年度は、学んだことを活かして実際に制作を行いたい。